

母国を見る目

東京外国語大学大学院比較文学研究専攻
プロホロワ・マリア

私はロシアで生まれ育ち、大学もモスクワで卒業した。そのときは日本語教育専攻で、大学生のうちから2回日本（秋田と福岡）に留学することができたし、卒業してからは勉強の続きとして本格的に日本に住むようになった（横浜→東京）。合計で数えれば、日本での留学期間は、今のところ、8年以上になる。この8年で私には様々な変化が起きただろう。そして、何が一番大きく変わったかという、「母国を見る目」だと思う。

高校生や大学生のころ、私は自分の生まれ育った国にはそれほど興味がなかった。高校生の頃、あるいはもう少し前から日本に夢中になっていたのである。ロシアにしながら、常に日本のドラマを見たり、日本の曲を聞いたりして、まさに頭の中は日本で出来ているような状態だった。高校の卒業式では、着物を着た（着付けは問題ありだったが…）。また、大学に上がると、同じく日本に興味を持ち、日本語を学ぶ仲間が増えて、今度は専門家として、さらに日本に集中することになった。自分の関心を共有してくれる人たち、それをさらに伸ばしてくれる環境があるのは、幸せだ。私はその幸せを糧にして、今も使っているスキルを取得していったし、当時の思い出は今でも、人生で一番温かい思い出かもしれない。でも、今思うと、とても未熟で、また視野が狭かったようにも感じる。

日本に来てから、まず、ロシアのことを色々と聞かれるようになった。ロシアにも方言があるのか、ロシアの食文化はどうか、などなど。自分がロシア人であることを初めて認識したのはそのときだったのかもしれない。成人するまでロシアで暮らしていても、ロシアのことをほぼ何も知らなかったこと、それから、ロシアは思っていたより謎が多く、言ってみれば知りにくいということに気づいた。どの国にも何か不思議な特性があるが、ロシアの場合、地理的な大きさが色々な観点から重要である。例えばモスクワに住んでいると、6千キロ以上離れているウラジオストクのことはよく分からない。自分から行ったり調べたり、その人たちと交流したりしないと、もしロシアに住み続けていてもずっと分からないままだ。国内からロシアのことを考えると、実際には「内」として、すなわち「自分の中のロシア」として考えているのは、ロシアのごく一部に過ぎない。自分の周りの環境と、親戚や親友の暮らす環境くらいである。外から見たロシアは、もっともっと大きくて、複雑で、面白い。ロシア語を専門とする日本の学生たちの話を聞いて彼らの質問に答えていると、私の中のロシアはモスクワ近郊などに限らない、より立体的な存在になっていった。一時帰国のとき、国内旅行や街の探索に出かけることも多くなった。母国のことは、最初から自動的に知っているのではなく、自分から知る努力をして関係を深めていくものだという事に気づいた。

最近特に、「母国」という概念が疑問視されることが多くなってきた。「母国」への感情、いわゆる「愛国心」などは非常に悪用されやすいので、私もこの言葉を聞くたびに少し警戒する。しかし、「私には母国はない」と主張する友人たちにも賛成できない。母国が複数だったり、「義母国」や「父国」と言った

方が正確だったり、国というよりも地域だったりして、形がそれぞれ異なるだけだと思う。「愛国心」も、国家にとって都合の良い発想だから頻繁に取り上げられるだけで、「母国」の定義では決してない。自分の育った家族に対してみんなそれぞれ異なる気持ちを抱いているように、「母国」に対する見方や考え方、感じ方は無限にある。愛せないと感じていても、その行動や性格に反感を覚えていても全然問題ない。でも、どこで生まれて、どこで育ったのか——それは大切な縁だ。自分のルーツを辿ってみることで案外心が満たされることがあるし、人間関係と同じように自分と「母国」の関係性を認識することで、ここまでの背景を考慮した、自分だけの道が見えてくる。私は、自分とロシアの関係に目をつむった方が断然楽である今の状況でも、母国に本格的な関心を持ったこと、そして自分にとっての大切な存在として受け入れたことを全く後悔していない。どこで生まれるかは選べないし、それで人を評価する意味も評価される意味もない。しかし、「母国を見る目」は自分で選べる。見ないという選択より、見るという選択をして、ピンと来る見方を模索してみようと本気で思えば、きっと何かしらかけがえのない発見に恵まれるのである。

日本に一途な青春を過ごした私は、今では、日本とロシアの現代文学をめぐる比較研究に取り組んでいる。また、2023年度からは東京外国語大学で教鞭をとり、日本の大学生たちにロシア語を教える予定である。きっと私と同じように遠いところにばかり目を輝かせている学生がたくさんいるのではないかと思う。私が彼らに伝えたいことがいっぱいある。たとえば、こう伝えたい。「遠いところへの憧れを存分にかみしめながらも、自分の住んでいる国、自分の生まれた国もよく見ておこう」。